

PANGEA

— 2020 TOKYO OLYMPIC —

Keywords

人口問題 娯楽 2020東京オリンピック
スポーツ 多文化共生 大陸移動説

1. プロローグ

もともと人類は1つの人種であった。海を渡り、複数のに散らばった結果個性が生まれた。土地、文化、歴史。それぞれ違い、同じものは無い。その違いは避けられず、当たり前には発生する事実である。しかし、人類は互いの個性を許容出来ず、互いに違う部分を列挙して憎しみ合い、数多の戦争をした。戦争が無くなってきた現代でも、移民などの問題に形を変えて牽制し合っている。しかし現代はグローバル化社会と呼ばれ、世界が均質化し、強制的に外国人と繋がっていくこと(多文化共生)が予想される。しかし島国でずっと守られてきた日本は、植民地になったことも無ければ、移民を受け入れたことも無く、海外に対し排他的である。従って、私たちは今まで以上に多文化共生に対し寛容になる必要がある。

2. 設計趣旨

互いの文化を超越し、繋がっていく場所を提案する。

3. タイミング

2020年に開催される東京オリンピックをきっかけとして日本人と外国人が交流をする機会を提供する施設を建設する。その期間は東京に205ヶ国、約1000万人の多種多様な人が来日し、多くの外国人、日本人がその場所に行き、互いの文化を理解し合う。現代のオリンピックは、過度な商業主義的な方向性が指摘され、本来の目的(世界がスポーツを通して一つになる祭典)を忘れていた。そこに原点回帰を図る多文化共生のための本建築は大きな意味を持ち、日本と世界に大きな印象を与える。

4. 敷地



図1. 敷地周辺図(有明)

東京の臨海副都心に存在する有明。このエリアは埋め立て地であり、歴史が浅く、未開発な部分が多く存在する。既に存在する地域で土地を決定しようとすると、必ずその地に根付いた歴史や文化が存在するので、本設計の目的に相応しくない。人工的に新しく作られた土地であるが故に、“無”色のコンテキストを持つ。さらに本敷地周辺にはオリンピックスタジアムや、豊洲新市場、有明ガーデンシティが建設される予定であり、日本人、外国人共に多くの人が来場することが見込まれる。又、東京オリンピック後も、周辺のイベント施設や観光施設の充実により多くの外国人、日本人がこの地に足を運ぶことが予想される。

5. 多文化共生に導ける文化

多文化共生には、互いの文化を理解することが不可欠である。しかし、文化にも理解しやすい文化とそうでない文化がある。初期段階で互いに理解しにくい文化(宗教や歴史等の戦争を彷彿させるもの)を持つてくることは共生ではなく破壊に導く可能性がある。従って、互いに理解しやすい文化を中心に共生へアプローチしていくことが必要である。社会学的にも証明されていることだが、人間は共通点が多い相手を見つけ、社会を築いていくという事実がある。つまり、多文化共生に導くことができるポイントは“共通意識”を互いに見出せるかということである。しかし、全く違う土地、文化、歴史的土壌で生活してきた人間同士の共通点を見つけることは容易ではない。従って、人間が誰しも共通している普遍的な要素を多く含んだものを扱う必要がある。例えば、その要素の一つに感情や感覚が挙げられる。当たり前の話だが、世界中の誰しもが家族を持ち、仕事をし、娯楽を楽しむ。その中でも複数人で感覚を共有できる娯楽に注目する。実際に、娯楽は異文化交流の要所で用いられ、人を繋げる確かなポテンシャルが証明されている。これを本建築のプログラムに取り込み、多文化共生に貢献する。

6. プログラム

東京オリンピック中：多文化共生エンターテインメント施設[スポーツコート(+スポーツ体験スペース)、音楽ホール(音楽体験スペース)、ギャラリー(芸術体験スペース)、レストラン&バー(食体験スペース)、映画館(映像体験ス



ak11046 小杉嘉孝

ペース)、オリンピックボランティア有明拠点事務所、インフォメーション、プロムナード]

東京オリンピック中は、数多くのこの地に来場する競技観戦者(日本人と外国人)に観戦の合間、観戦後の時間で立ち寄ってもらい、エンターテインメントや娯楽を通して多くの人たちが異文化交流し、文化を超えて繋がっていく場所となる。

東京オリンピック後：2020年東京オリンピック多文化共生記念館[イベントスペース(スポーツも可能)、音楽ホール(音楽体験スペース)、ギャラリー(芸術体験スペース)、レストラン&バー(食体験スペース)、映画館(映像体験スペース)、2020東京オリンピック記念堂、インフォメーション、プロムナード]

2020年に行われた東京オリンピックは商業主義になっていた現代のオリンピックから、本来の目的(世界がスポーツを通して一つになる祭典)に原点回帰する試みを行った場所として、人々の記憶に残っていく。そして場所は異文化交流が行える記念館として存在し続けることで、この地の無色だったコンテキストを多文化共生の原点として決定していく。「日本の観光地ベスト30 2014年版」で外国人観光客の選が行きたい観光地に広島県平和記念資料館が第二位として選ばれている。これは、平和への想いを次世代に伝えていきたい観光スポットとして海外からも注目されていることである。本建築も同様に多文化共生という平和を願った場所として外国人観光客が集まる場所になり、そこに来た日本人と文化を超越し、繋がっていく場所として変わらずに存在し続ける。

7. モチーフ

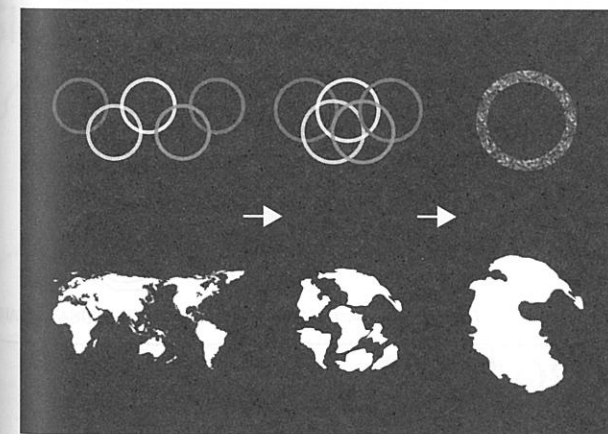


図2. モチーフのダイアグラムイメージ

パンゲア大陸

現在の五大大陸は二億五千万年前まで一つの大陸であった。その大陸のことをパンゲア大陸という。それが海によって分けられ、段々と現在の形になっていった。海によって5つの大陸に分けられた結果、土地ごとに全く違う文化が育った。そこにオリンピックの本来の目的(スポーツを通して国ごとに存在する価値観を超越し、一つにつながる。そして、オリンピックマークは五大大陸を示し、重

なり合う輪はまた、平和への発展を願ったもの)を重ね合わせると、1つの種族だった原点に立ち返る場所、つまり多文化共生の地=パンゲア大陸と定義することが出来る。

8. 観戦(観賞)と体験のシステム

今まで、オリンピックなどのイベントでは国単位のみとまりでチームを形成し、競争してきた。そして多くの場合、私たちは観戦者であった。それでは、多文化共生は望めない。なぜなら本当の意味で理解することは、人間同士のやり取りがないと成立しないからである。例えば、制度や、法律、政策で結ばれたとしても、意識が繋がらず、内戦やデモで対立する事例も数多くある。逆に地域のコミュニティの希薄化する現代で、隣の家の子供の音がうるさいという問題もコミュニティが繋がることによって不快感を感じなくなったという事例もある。これらことから、人間同士を繋げ、互いの文化を理解することが必要になる。従って、自分たちがその国の当事者となり、他国の文化を身を持って体験し、その国の人との交流を通して本質的な異文化理解に繋げる。具体的には、観戦(観賞)と体験のスペースを要素ごとに併設化することでそれを実現する。体験スペースで異文化を体験しつつ、外国の人と交流することでその文化の本質的な理解を目指す。そうすることで初めて異国に関心を寄せ、観戦(観賞)し、異文化の理解する努力をするようになる。今まで“敵”と認識していたものを“好敵手”と良い意味で認識し合い競争していく。人と人を繋げるスポーツを中心に普遍的プログラムを配置するその全てに、観戦(観賞)と体験する場所を作る。そして、その場所を利用した人達が一人でも多く繋がることを願う。

9. おわりに

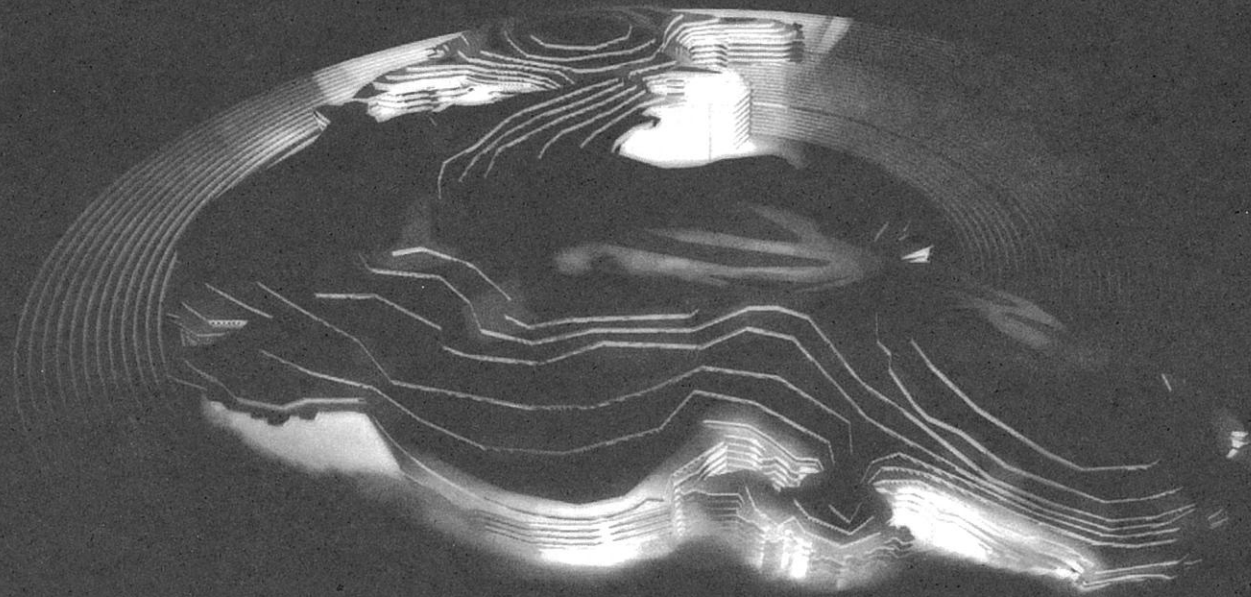
オリンピックが終わり、周りの仮設スタジアムが撤去されても尚、この建築は多文化共生を応援する施設として存在し続ける。いつの日か本当に分かり合い、多文化共生が可能になる日を願って。

参考文献

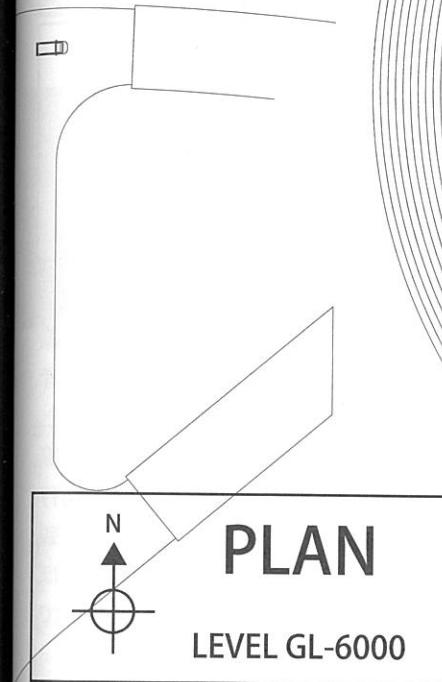
- 1) 東京大改造マップ2020 日経BP
- 2) 東京都庁 2020東京オリンピック政策方針
- 3) <http://www.newsdigest.de/newsde/news/featured/3074840.html>
- 4) 内閣府 日系定住外国人施策の推進について
<http://www8.cao.go.jp/teiju/suisin/sesaku/index.html>
- 5) JITCO 公益財団法人 国際研修協力機構
http://www.jitco.or.jp/system/seido_enkakuhaikai.html
- 6) 厚生労働省 外国人雇用対策
http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/koyou/gaikokujin/index.html
- 7) 東京外国人雇用サービスセンター
<http://tokyo-foreigner.jsite.mhlw.go.jp/home.html>

PANGEA

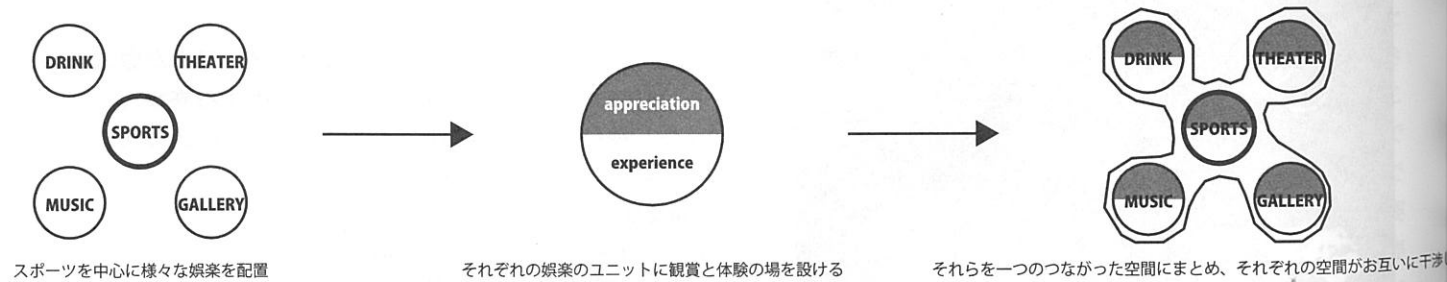
-2020 TOKYO OLYMPIC-



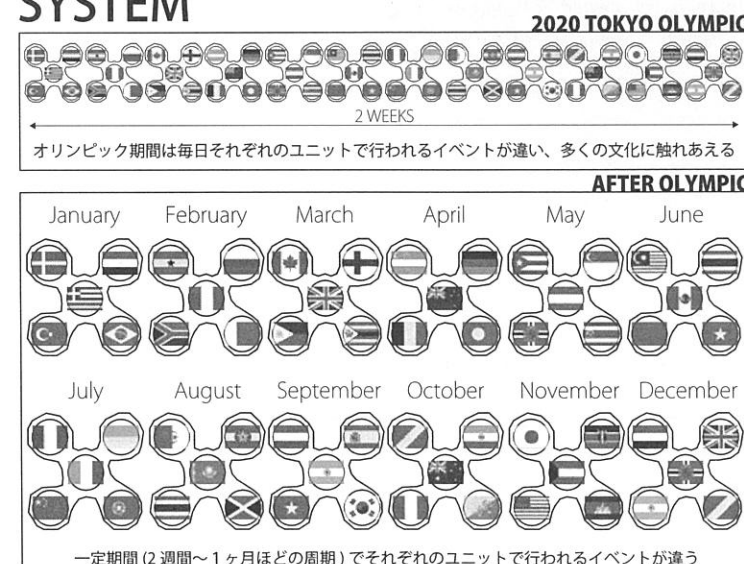
PLAN



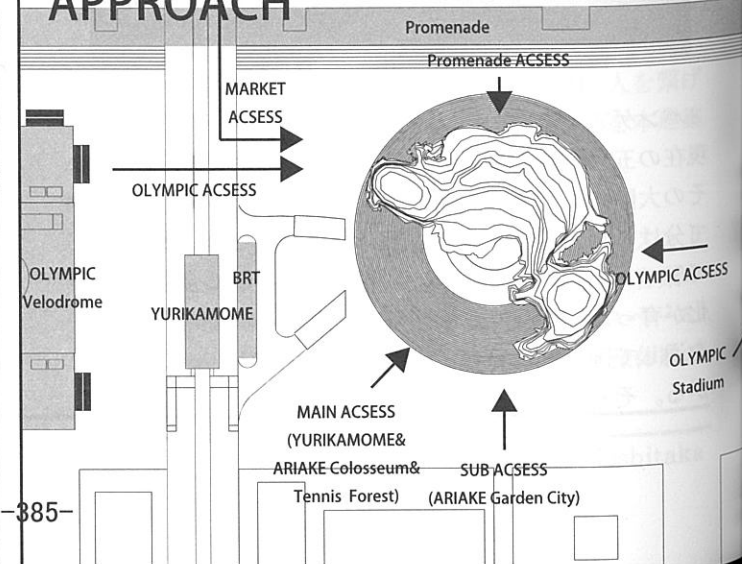
DIAGRAM



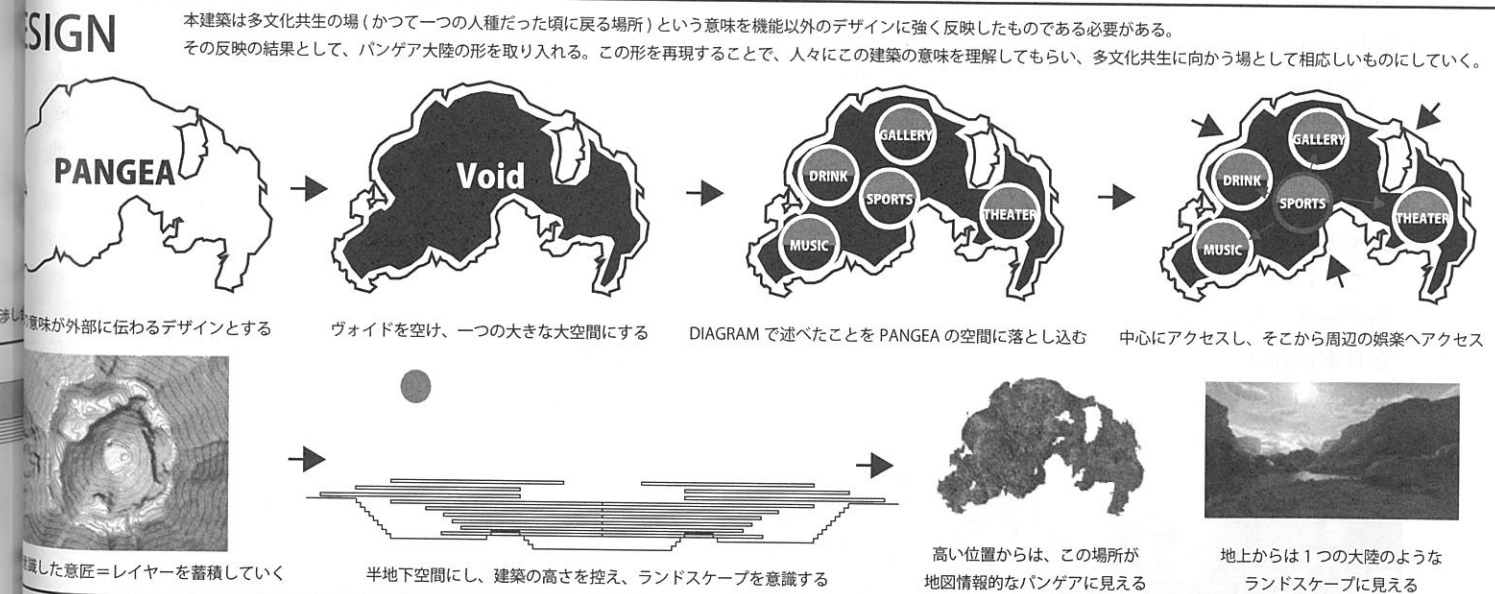
SYSTEM



APPROACH



DESIGN



ME COURSE

